

前回私たちは、エペソの町におけるパウロの宣教について見ました。すでに三週間が過ぎましたので、簡単に復習しておきたいと思います。エペソにおいて、パウロは、それまで同様、まずユダヤ人の会堂でみことばを語ります。それが三ヶ月間続くわけですが、その後で、ユダヤ人のある者たちが、心を頑なにし、パウロの宣べ伝えている主の道を公衆の前でののしるのです。そこでパウロは、みことばを語る場所を「ツラノの講堂」へと移し、そこで二年間、毎日みことばを教えました。結果、アジア州に住むすべてのユダヤ人とギリシャ人が、主のことばを聞くようになるのです。

その中から、主イエスを信じる人たちが起こされていったわけですが、その助けとなったのが、パウロの手によって行われた病の癒しや悪霊の追い出しであったということが出来ます。ただこの時には、その続きがありました。つまり、パウロの行っていることを真似ようとしたユダヤ人の魔よけ祈祷師たちが、悪霊を追い出すどころか、かえって襲われてしまったのです。それは、彼ら自身、主を信じていないのに、主の御名をためしに使おうとしたからですが、この時、悪霊はこう言いました。「自分はイエスを知っているし、パウロもよく知っている。けれどおまえたちは何者だ」と。

このことがエペソ中の人々の知るところとなり、彼らは恐れを感じて、主の御名をあがめるようになるのです。もちろん、すべての人が信仰に入ったわけではありません。でも、信じた人々は、自分たちのしていたこと、つまり、自分の罪を告白し、なかでも魔術を行っていた人々は、みなの前でその書物を焼き捨てたのです。そのようにして、主のことばは、エペソをはじめ、アジア州全体に力強く広がっていきました。

そのことがあって後、今日の箇所「ただならぬ騒動」が起こるわけですが、それを見る前に、21-22 節を見ておきたいと思います。「これらのことが一段落すると、パウロは御霊の示しにより、マケドニヤとアカヤを通ったあとでエルサレムに行くことにした。そして、『私はそこに行ってから、ローマも見なければならぬ』と言った。22 そこで、自分に仕えている者の中からテモテとエラストのふたりをマケドニヤに送り出したが、パウロ自身は、なおしばらくアジアにとどまっていた」（どうぞ前の地図で場所を確認して下さい）。

エペソでの滞在が、これまでの最長ともいえる三年にも及んだこと、またパウロの働きを通してアジアに住むすべての人が、主のことばを聞いたということからして、このように御霊が、パウロを次のところへ導いたのも容易にうなずけると思います。マケドニヤとアカヤとは、以前、パウロがみことばの種を蒔いた地ですから、主は、再び彼を導くことで、そのの兄弟たちを励まし、力強められるのです。でも、それで終わりではありません。その後、エルサレムに行き、それからローマに行くことも、主は彼に示されたのです。

ちなみに、当時のローマとは、世界の中心ですから、パウロにとって、そこに宣教の拠点を置くことは、極めて当然のことであり、その後、さらに西のスペインに行くためにも必要なことでした。ですから、この時からパウロの思いは、ローマへと向けられるのです。そのことについては、また後日見ますが、皆さん、なぜパウロは、テモテとエラストをマケドニヤに送り出した後、なおしばらくアジアにとどまったと思いますか？その理由は、ここには書かれていませんが、彼の書いた手紙の中に、そのヒントを見ることが出来ます。

**第一コリ 16:1-4** 「さて、聖徒たちのための献金については、ガラテヤの諸教会に命じたように、あなたがたにもこう命じます。2 私がそちらに行ってから献金を集めるようなことがないように、あなたがたはおののおの、いつも週の初めの日に、収入に応じて、手もとにそれをたくわえておきなさい。3 私がそちらに行ったとき、あなたがたの承認を得た人々に手紙を持たせて派遣し、あなたがたの献金をエルサレムに届けさせましょう。4 しかし、もし私も行くほうがよければ、彼らは、私といっしょに行くことになるでしょう」。

パウロは、貧困で苦しむユダヤの諸教会を助けるため、また主の教会が、ユダヤ人と異邦人という人種や地域の壁を超えて一つとなるために、異邦の地に建てられた諸教会に献金を命じました。自分がそこに行った際に、それを受け取り、エルサレムに届けるためです。そのために、テモテとエラストを先に送り出したと思われれます。ですから、この時、エペソにいたパウロとしては、マケドニヤとアカヤに行った後、そのままローマに行った方が明らかに都合は良かったのですが、ユダヤの聖徒たちを助け、また教会の一致を保つためにも、

あえて全く逆方向のエルサレムに行ってから、ローマに向かうことにするのです。そして、そんなパウロが、まだエペソにいる間に、今日の「ただならぬ騒動」が起きました。

24-27 節「それというのは、デメテリオという銀細工人がいて、銀でアルテミス神殿の模型を作り、職人たちにかなりの収入を得させていたが、25 彼が、その職人たちや、同業の者たちをも集めて、こう言ったからである。『皆さん。ご承知のように、私たちが繁盛しているのは、この仕事のおかげです。26 ところが、皆さんが見てもいるし聞いてもいるように、あのパウロが、手で作った物など神ではないと言って、エペソばかりか、ほとんどアジア全体にわたって、大ぜいの人々を説き伏せ、迷わせているのです。27 これでは、私たちのこの仕事も信用を失う危険があるばかりか、大女神アルテミスの神殿も顧みられなくなり、全アジア、全世界の拝むこの大女神のご威光も地に落ちてしまいそうです。』

すでに見たように、三年にも及ぶパウロの宣教によって、エペソの町を始め、アジア州全体にも、福音による変化が生まれていました。そのことは、主を信じた者たちが焼き捨てた魔術の書物の多さからも明らかですが、でも、そこには主を信じない人もいたわけですから。その彼らにとって、福音によってエペソの人々にもたらされた変化は決して好ましいものではありませんでした。むしろ、それはフラストレーションの溜まるものであったのです。なぜなら、それによって自分たちの収入と生活にも悪い影響が出たからです。

世界の七不思議の一つであるエペソのアルテミス神殿と、人々の行っていた魔術との関わりについてはよくわかりません。でもエペソの人々の間に魔術が広く浸透していたこと、またそこではアルテミス神殿が町の中心であったことからして、何らかの繋がりがあったと思います。仮になかったとしても、主を信じた人たちは、魔術だけでなく、偶像の神としてのアルテミスとその神殿から遠ざかったわけですから、当然それに関する仕事をしてきた人々には、その影響が出ていたはずですから。

そこでアルテミス神殿の模型を作り、それを売って、職人たちに多くの収入を得させていた銀細工人のデメテリオが、同業者たちを集め、彼らを扇動して、この騒動を起こすのです。この時、アルテミスに関する祭りが行われていたと思われそうですが、この騒ぎに加わった大多数の者は、なぜ集まっているのかさえ知らなかったとあります。ちなみに、この時、捕らえられたのはパウロではなく、彼の同行者のガイオとアリスタルコという人たちでした。それを知った時、パウロも劇場に入っていくとしますが、彼の弟子やアジア州の高官で、彼の友人たちがそれを止めさせます。パウロの身を案じるどころから、また彼の存在によって、騒ぎがもっと大きくなることを懸念したのでしょう。

いよいよ集会が、混乱状態に陥った時、ユダヤ人たちは、自分たちとクリスチャンとを区別する意味もあつてか、アレキサンデルという人を前に出し、彼に弁明させようとしています。ところが、それもまた、さらなる混乱を生み出すことになるのです。というのも、彼がユダヤ人であるというだけで、群衆は「偉大なのはエペソ人のアルテミスだ」と叫び始めてしまったからです。しかも、それは「二時間ばかりも続いた」とあります。まさに誰も手のつけようのない異常な状態にまで、発展したことがわかります。

そこで、町の書記役（今でいうと市長のような人）が登場し、彼の説得によって、大混乱の集会はようやく解散に至るのです。開きませんが、その内容は 35 節以降に記されています。まとめるなら、エペソの町がこれまで通り、今後も変わらないということ、この時、捕らえられたパウロの同行者たちは、神殿を汚した者でもなく、アルテミスをそしった者でもないということ、もし訴えがある場合は、このような暴動のような形ではなく、裁判の日に、地方総督たちに訴え出るという正しい方法を取る必要があるというものでした。

そのようにして、ようやく騒動は終わりを迎えます。ここで話をこの騒動の火つけ人であるデメテリオに戻したいと思います。彼はなぜこのような騒ぎを起こしたのでしょうか？すでに見たように、それは人々が以前のように神殿の模型を買わなくなったり、大女神アルテミスをもはや崇拝しなくなったからですが、それがパウロの影響によるもの、つまり、彼が「手で作った物など神ではない」といって人々を迷わせたからだだと彼は主張しました。皆さんは、この言葉を聞いて、どう思われますか？

デメテリオとしては、これまでのように仕事が繁盛しなくなったことに対する不安や恐れ、また、これまで信じ捧げてきたものを失うことに対する怒りなどがあつたと思うのですが、では、彼の主張は、正しいものでし

ようか？「手で作った物は神ではない」というパウロの言葉に疑問を投げかけたということは、少なくとも彼自身と彼に賛同した人々は、手で作った物を神としていたということです。もう一度言います。彼らは、手で作った物を神だといったのです。手とは、人の手のこと、つまり、それは人が作った神、ということです。このことは、八百万の神々が存在する日本の教えを受けた人にとっては、何の違和感も覚えなないかもしれません。でも手で作られた物が、本物の神になり得るのでしょうか？そのように主張する人は、本当にそのことを信じ、利用するためではなく、その神にいのちをささげることをするのでしょうか？

デメテリオが、神として崇めていたのは、ギリシャ神話の大女神アルテミスではなく、それが自分にもたらしてくれる収入、つまり、お金であったと私は思います。だからこそ、彼の口から最初に出たのは、「私たちが繁盛しているのは、この仕事のおかげです」というものでした。それゆえに、パウロを通して、人々のうちに変化が生まれ、彼らが偶像の神を捨てた時、それによって収入が減ったので、彼は腹を立ててパウロを攻撃したのです。人々の宗教心を利用し、「アルテミスとその神殿のご威光も地に落ちてしまう」といって、彼らの不安をあおったのも、結局は、自分たちの収入源を回復させることを考えてのことだと思うのです。

そもそも大女神アルテミスが、人の作り出した物ではなく、本当の神であったなら、なぜ自分の名声を自分で守らないのか？それが人の手によって作り出された物にすぎないから、エペソの町に守ってもらわないと、自分では何もできない偽りの神、偶像だからです。それが本当の神といえますか？そのような偶像を崇むことで、本当の幸せが得られるのでしょうか？もちろん、それを使って、金儲けをすることはできると思います。でも、それは一時的な救いであって、人類の最大の敵である死から私たちを救うことはできないのです。

でも、パウロが宣べ伝え、また私たちも信じている神様は、この世が造られる前からおられ、すべてのものは、この方によって創造されました。主は、私たちに守られる必要のないばかりか、私たちの必要を満たし、何よりも悪魔の誘惑と罪の結果である滅びから私たちを救って下さるお方なのです。今の世における一時的な幸福ではなく、この世を超えた、永遠に続く祝福を神様は約束して下さっています。それが真実であり、本物であることを証するために、神様は、独り子のイエス・キリストをこの世に遣わされました。神を神とせず、かえって人の手によって作られた物やお金を神としてあがめるような罪深い私たちのために、彼を十字架にかけてさばくことで、信じるすべての者に、赦しと永遠のいのちを与えて下さるためです。

この世の常識からすると、キリストを信じ、彼に自分の人生を託すよりも、お金の力を信じ、それを得させてくれる物にすがった方が、幸福になれると考えることでしょう。でも、ボトムラインは、それがお金であれ、人の手によって作られた偶像の神々であれ、また自分自身であれ、それらは老いや死という問題から私たちを救うことはできないのです。だから、私たちに必要なのは、本当の救い、それを与えることのできる、まことの神様です。その方こそ、私たちを愛し、私たちのために十字架にかかって贖いの死を遂げられた方、また死人の中からよみがえられることで死に勝利された神の救い主、イエス・キリストです。